

平成31年度

札幌日本大学中学校

入学選抜試験

【1月7日】

国 語

試験時間 60分

1. 指示があるまで、問題冊子さっしを開いてはいけません。
2. 答えは、解答用紙に記入してください。問題は、～まであります。
3. 試験監督かんとくの先生の指示に従って、試験を開始してください。
4. 試験の途中で、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5. 試験開始の指示があってから、解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6. 解答用紙には、解答以外を記入しないでください。
7. 試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8. 机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪かぜなどにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生あらかじに申し出てください。

次の文章は、哲学者である筆者が、東日本大震災から三ヶ月たった、二〇一一年の六月に書いたものです。なお、筆者は、一九九五年一月に起こった阪神・淡路大震災の被災者の一人でもあります。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

(本文は一部表記を変えたところがあります。)

〈隔たり〉ということ、いまもって強く意識させられたままだ。被災した地域の人びとと被災しなかったわたしたちとのあいだの〈隔たり〉。

地震が起こった直後、被災地から遠く離れたわたしたちは、まずはテレビの伝える映像に息を呑むばかりであった。映像に釘づけになる日を幾日か過ごし、十六年前関西で被災した者として、すぐに何ができるだろうかとおもった。義捐金を送ること、被災地に食料や物資がしつかり回るようとりあえず消費を控えるということ……。

被災地に声を届けなければとおもっても、どんな言葉にもまとまらなかつた。① 外からの声は、ときに暴言になる。そのことをいやというほど知っていたからである。神戸のとき、ホウドウ陣のヘリコプターに、建物の下敷きになっている人の声が聞こえないと憤った人もいたが、だれかがずっと見守ってくれていると感じる人もいた。おなじ一つの出来事が、被災のありようによって正にも負にもなった。そのことが身に沁みこんでいた。だからこのたびも、みな言葉づかいに慎重になり、口数もつい減った。

一方、仙台市街に住む友人によれば、地震後しばらく、倒壊はまぬがれたものの引き続き強い余震に、深夜独りで部屋にいたのが怖くて、みなぞろぞろ街路に出てきたらしい。うずくまっている人がいれば、だれかれなく「大丈夫ですか」と声をかけあった。背負ってきたもの、抱え込んできたものがみなチャラになったかのような負の解放性、それを友人は「まちが突然、開いた」と表現した。

② が、目を追うにつれて、この対比は逆転してゆく。

長く住みなれた家では身体はまわりの空間に溶けでているが、避難所では身体は皮膚の内側に閉じこもる。他人の気配に緊張は解けず、何かがちよこつと身体にふれるだけで、身は疎み、凍てついてしまう。皮膚はずるむけのそのように傷つきやすく、それにつれて気持ちもささくられたつてくる。だからつい「事件」も起こる。罵りあいや怒号、そして*慟哭が、あちこちで噴きだす。③ 身をほどく空間もなく、たがいに擦り傷をこすりつけあうばかりのそうした生活は、耐

えうるものではない。

当初、身を襲おそっているものの姿さえとらえられず、茫然ぼうぜんとするばかりだった被災者の心根に、やがてじわりじわり、喪うしなったものの大きさが沁みってくる。家族や友人、あるいは家、あるいは職という、これまでみずからの生存の根であったものを失い、どうじぶんを立てなおすべきか、途方(C)に暮れるうち、だんだん言葉少なになってゆく。じぶんだけが生き残ったことに責めを感じ、押し黙だまってしまう人もいよう。からだは忘れたがっているのに、頭のほうは忘れてはいけないと言う、そんな二つの声に引き裂さかれていく人もいよう。

やっと水道が通ったばかりの地域もあれば、普段ふだんどおりの生活に戻もどった地域もある。「元」に戻もどることを、ダンネン(b)した人たちもいる。そんな彼らにとって、一人ひとりの記憶きおくが深く刻まれた柱や瓦かわら、日用品の数々がひとまとめに「がれき」と呼ばれるのは、耐えがたいことだろう。そして、一人、また一人と避難所を去ってゆくなかで、取り残されたという感覚に押しつぶされ、崩くずれてゆく人も、悲しいけれどきつと出てくるだろう。「隔たり」は被災地でもさまざまなかたちで*増幅するばかりだ。

逆に、被災地から離れたところからは、妙みょうにはしゃいだ声が聞こえはじめている。「エコタウン」をはじめとする東北の復興(C)、コウソウを、メニュー片手に得々と語る人たち。いつじぶんの出番が来るかと、固唾(D)を呑のんで待っている*都市ブランドナーたち。政府の失政を声高こわだかに論評する人たち。あるいは、「がんばろう」「お見舞みまい申し上げます」という、もはや*情性と化した物言い。ここにひとは、被災した人たち一人ひとりに届けられることのない「空語」をしかみないであろう。

— 中 略 —

いずれにせよ、「隔たり」はなくなるところか、いつそう大きくなるばかりだ。被災地のなかでも、被災地とそれ外とのあいだでも。

被災地ではいま、多くの人が「語りなおし」を迫せまられている。じぶんという存在、じぶんたちという存在の、語りなおしである。

アイデンティティ（じぶんがだれであるかの根拠こんきよとなるもの）とは「じぶんがじぶん自身に語って聞かせる物語」だと言った人がいる。R・Dレインという精神分析医だ。じぶんはだれの子か？ じぶんは男女いずれの性に属しているか？

じぶんは何をするためにここにいるのか？ こういう問いが、人それぞれのアイデンティティの核にある。これらの一つでも答えが不明になったとき、わたしたちの存在は大きく揺らいでしまう。

子に先立たれた人、回復不能な重い病に冒された人、事業に失敗した人、職を失った人……。かれらがそうした理不尽な事実、納得しがたい事実をまぎれもないこととして受け容れるためには、じぶんをこれまで編んできた物語を別なたちで語りなおさなければならぬ。人生においては、そういう語りなおしが幾度も強いられる。ここでは過去の記憶ですら、語りなおされざるをえない。その意味で、これまでのわたしから別のわたしへの「イコウ」は、文字どおり命懸けである。このたびの震災で、親や子をなくし、家や職を失った人びとは、こうした語りのゼロ地点に、否応もなく差し戻された。

こうした語りなおしのプロセスは、もちろん人それぞれに異なっている。そしてその物語は、その人みずから語りきらなければならぬ。戦後六十年経っても、戦争で受けた傷、大切なだれかに死なれた事実をまだ受け容れられていない人がいるように、語りなおしのプロセスは、とてつもなく長いものになるかもしれない。

語りなおしは苦しいプロセスである。そもそも人はほんとうに苦しいときは押し黙る。記憶を*反芻することで、傷にさらに塩をまぶすようなことはしたくないからだ。あの人が逝ってじぶんが生き残ったのはなぜか、そういう問いにはたぶん答えがないと知っているから、つい問いを抑え込んでしまう。だれかの前でようやく口を開いても、体験していない人に言ってもわかるはずがないと口ごもってしまうし、こんな言葉でちゃんと伝わっているのだろうか、一語一語、感触を確かめながらしか話せないから、語りは往々にして途切れがちになる……。

③ 語りなおすというのは、じぶんの苦しみへの関係を変えようとすることだ。だから当事者みずからが語りきらねばならない。が、これはひどく苦しい過程なので、できればよき聞き役が要る。マラソンの伴走者のような。

けれども、語りなおしは沈黙をはさんで訥々としかなさねないために、聴く者はひたすら待つということに耐えられず、つい言葉を迎えにゆく。「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの？」と。言葉を呑み込みかけているときに、すらすらとした言葉を向けられれば、だれしもそれに飛びついてしまう。他人がかわりに編むその物語が、イチジョウの光のように感じられてそれに乗る。じぶんでとぎれとぎれに言葉を紡ぎだす苦しい時をまたぎ越して。こうして、みずから語りきるはずのそのプロセスが横取りされてしまう。言葉がこぼれ落ちるのを待ち、しかと受け取るはずの者の、その前のめりの聴き方が、やっと出かけた言葉を逸らせてしまうのだ。

□ というのは、思うほどたやすいことではない。

いや、そもそもわたしたちはほんとうにしんどいときには、他人に言葉を預けないものだ。だからいきなり「さあ、聴かせてください」と言う人には口を開かない。黙り込んでいた子どもが、母親が炊事にとりかかると逆にぶつくさ語りはじめるように、言葉を待たずにただ横にいるだけの人の前でこそ人は口を開く。そういうかわりをまずはもちうることで大切である。その意味では、聴くことよりも、傍らにいつづけることのほうが大事だといえる。

しかし、それは被災地から隔たったところで暮らしている人にできることではない。ちよいとボランティアに行ったからといってできることでもない。

いま「復興」を声高に語る声は、濁流のなかでおぼれかけている人に橋の上から語る声のように響く。詩人の和合亮一さんがある対談のなかで、「自分は川の中で一緒におぼれないと何もいえない」というジャーナリストの声にふれ、それこそ「想像力」であり、「川で一緒におぼれるのが詩なんです」と語っていた。濁流に入れなくても、濁流に入り込む想像力はもちうる。その想像力を鍛えておくことが、いまは必要だ。東北の友人に次に会う日のために。いつか東北を旅するときに知りあった人の語りにじっと耳を傾けられるように。(鷺田清一『おとなの背中』より 発行 角川学芸出版)

* 怒号 …… となること、あるいはその声。

* 慟哭 …… 大声をあげて泣くこと。

* 増幅 …… ある状態の度合いが増していくこと。

* 都市プランナー …… 都市計画を立案したり、工事などを指揮したりする人たち。

* 惰性 …… 今までのままの習慣や状態。

* 反芻 …… くり返し味わったり、確かめたりすること。

問一 ——— 線(a)～(e)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 ——— 線(A)～(D)の語句の本文中での意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(A) ささぐれだつてくる

ア どうでもよくなつてくる

イ 悲しい気分になつてくる

ウ 追いつめられ高ぶつてくる

エ 荒れたものになつてくる

オ 痛みが増してくる

(B) 身をほごく

ア リラックスする

イ リフレッシュする

ウ リセットする

エ リピートする

オ 痛みが増してくる

(C) 途方に暮れる

ア 考えることが多く混乱する

イ すべきことが見当たらず迷つてしまう

ウ どうしてもいか分からず困り果てる

エ 面倒なことばかり気づくようになる

オ 方法はあるのに手をつけられない

(D) 固唾を呑んで

ア 肩がこるほどに緊張して

イ 一心になりゆきを見守って

ウ 冷静に事態の流れを見つめて

エ 信じたくない顔つきで

オ 期待通りの変化を予感して

問三

□に入る語句として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 待つ

イ 黙る

ウ 語る

エ 聴く

オ 預ける

問四

——線①「外からの声は、ときに暴言になる」とありますが、これは筆者のどのような考えから生まれた言葉でしょうか。それを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 実際に被災地に行ったことがない人たちが発する言葉は、表面的な事実しかわかっていないことが多いので、信用するべきではないという考え。

イ 被災地から遠く離れたところにいる人たちは、地震の被害について実感がわからないこともあるので、よけいなことを発言するべきではないという考え。

ウ 被災していない人たちが発する言葉は、被災者たちの気持ちを意に反して傷つけることもあるので、そうした不用意な発言は自制するべきであるという考え。

エ 他人からの支援や励ましは、被災者たちの要望とはちがうこともあり、そうしたものの押しつけが、被災者たちの心の負担を増やすおそれがあるという考え。

オ 被災者たちの心境は、被災していない人たちには本当には理解できないので、そのことで、被災者たちがさびしさをつのらせていることを知るべきだという考え。

問五 ———線②「この対比は逆転してゆく」とありますが、ここで起こっている変化を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大きな地震と津波とによって何もかもが失われたことで、それまでじぶんがとらわれていた家族や財産へのこだわりから解放され、何物にもとらわれない生き方のすばらしさを実感したが、避難所での生活は不自由を強いられ、他人に気づかいをせざるを得ないことで、過去の生活をなつかしむようになった。

イ 町の中に何もなくなったことを知った時、多くの人々がはじめて生きていること自体に喜びを感じ、他者への感謝の気持ちを感じるようになったが、避難所では他人が物欲にとらわれている姿を多く見てしまい、人間という存在に失望し、その一人であるじぶん自身にも不快な思いを抱くようになった。

ウ それまで起こるはずがないと考えられてきた地震と津波とによってすべてが失われたことで、人間や社会の未来というものは予測はできないものであることを知ったが、避難所での生活はかわりばえのしない衣食住をともなう平凡なものであったために、震災直後の緊張感を失い生活もだらしくなっていた。

エ 大きな地震と津波とによって何もかもが失われたからこそ、人々は公平な視点で復興を考え、人と人とのつながりを生み出すような地域をつくっていかうと決意したが、避難所での生活はそうした決意とはまったく関係ない空間であったので、どうしてよいかわからなくなり、未来への展望を失っていった。

オ 大きな地震と津波とによって何もかもが失われたからこそ、人々はごく自然に、じぶんだけでなく他の人も思いやれるようになり、たがいに助け合ったが、避難所での生活が長引くことで、常に身近にある他人の気配が次第に重

荷になり、わきあがってくる感情にとらわれて気分がめいっていくようになった。

問六 ——線③「語りなおすというのは、じぶんの苦しみへの関係を変えようとするのだ」とありますが、どういうことですか。八十字以内で説明しなさい。ただし、句読点や符号ふくごうも字数にふくみます。

問七 ——線④「川で一緒におぼれる」とは、この場合、どのような意味となりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つらい状況じょうきょうに至っている人の苦しみを味わうために、他人の危険を察する想像力を身につけること。

イ 困難な状況に直面している人の苦しさを自らも体験し、想像力を用いてそれを文学作品にすること。

ウ 命の危機に直面している人の姿を想像力によって思い浮かべ、その人の苦しみを冷静に伝えること。

エ きびしい状況に苦しんでいる人に寄りそい、想像力によってその苦しみに共感しようと努めること。

オ 自然の中に没入ぼつじゅうし、そこで出会う可能性がある危険を想像力によって理解し、人々に警告すること。

問八 この文章で、筆者は自分の考えを、どのような順序で述べていますか。次のア～カのうち、四つが本文中で述べられている内容です。それらを選び、筆者が述べている順に、記号で答えなさい。

ア 筆者自身の阪神・淡路大震災での経験が、東日本大震災でも活用できるという確信をもって、被災者に対して避難所での生活の心がけを積極的に伝えている。

イ 被災から時間がたつにつれて、被災者どうしでも、被災者とそうでない者との間でも（隔たり）が生まれ、それがますます大きくなっていると述べている。

ウ 「語りなおし」の聞き役には、時間をかけて傍らにいつづけ、相手の言葉にじっくりと耳を傾けることが必要であり、そうするためには想像力が大切であると説いている。

エ 東日本大震災の被災者がアイデンティティを回復するには、被災者自身の体験の「語りなおし」が不可欠だが、それには専門的な研究をしている人の意見もふまえる必要があると考えている。

オ 東日本大震災の被災者が、家族や家を失ったことでアイデンティティが揺らいでいる可能性を指摘し、現実を受け容れるために、「語りなおし」の必要性をうたったえている。

カ 東日本大震災で被災した人たちに対して、阪神・淡路大震災での経験を思い起こしながら、被災者たちが味わっていると思われる、被災後の様々な心情に思いを寄せている。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(本文は一部表記を変えたところがあります。)

雑木林のなかには、思ったより奥が深かった。

団地の五階のベランダから見渡すと、林はほんのひとまたぎでできるぐらいに見え、その先に住宅地の屋根がっらなっている。さらに、そのはるか彼方に町が広がっているのだ。

① 櫟の木立に檜や椎がまじっていて、その幹が行く手の小径を阻むように放射状に伸び分かれたり、横這いになったりしている。もはや背後には木々の群れしか見えない。

「洋二。……あれ、ほんとにコロの声だったよな、ぜったいだよな」

「うん、ぜったい」

洋二は、兄の歩幅に合わせようと、できるだけ大股に歩きながら応えた。息が弾んでいる。頸筋からポロシャツの背中にかけて、じっとり汗をかいている。

「ゆうべも、その前の晩も、聞こえたよな」

「うん、その前の前の晩も、聞こえた」

二人は、林の向こうに犬の声を探すふうに「I」をそばだてた。しかし、聞こえたのは、遠くを走るバイクの音だけだった。

このところ兄弟は毎晩のように、遠い犬の声を聞いていた。激しく吠えるというのではなく、ほんの二、三声ずつ間をおいて、野太い声で威嚇するように吠えているのだ。——それは、きまって夜の十時ごろ、雑木林の奥から聞こえてきた。

最初に聞いたのは、四日前だった。二人で九時ごろまでテレビを観たあと二段ベッドに入ったが、寝つかれないまま闇を見つめていたら、下段から洋二が弘に声をかけた。

「お兄ちゃん、……コロが吠えている」

まさにコロの声そっくりだった。弘は、思わず窓を開けて、コロオ、コロオと叫んだ。

② 林の向こうにコロがいる、と思いつ定めた。日曜日を待って、母親に内緒で雑木林に入ってきたのは、そのためであった。雑木林の小径は、まだまだつづいている。

十分ほど歩いて、少し疲れが出てきたころだった。洋二が、急にいいだした。

「お兄ちゃん、……足がかゆいね」

③ 遠慮がちな小さな声だった。——弘も、さっきから半ズボンの裾際を掻いている。

「蚊だよ。……このぐらいいい、がまんしろ」

「真つ黒だよ、お兄ちゃんの足……」

見ると、裸の足に黒い蚊の群れが斑になって食いついている。弘はあわてて野球帽を脱いで、足をはいた。痺れるような、かゆみが襲ってきた。狂ったように激しく足踏みをした。

「走ろう、お兄ちゃん」

「おまえ、さき走れ。……ころぶなよ」

不思議なことに、顔や腕には蚊はとまらない。もっぱら足だけを狙ってくる。それに、蚊が集まるのは弘のほうに多く、洋二にはそれほどでもない。

——いつだって、そうなんだ。

弘は、前を走っていく洋二の細い足を見ながら、そう思った。

——ひどい目にあうのは、いつだって、ぼくのほうなんだ。

弘は、父親に殴られたことを思っている。酔って帰宅して母親と喧嘩になると、泣いてとめようとする弘を、父親は邪魔ものを排除するように殴りつけた。それも、一度や二度ではなかった。

そんなときでも、いつも洋二はぐっすり眠っているのだった。

——それに、洋二はいつだってママと一緒にだから、いいよな。

冬休みのあいだずっと、弘だけ叔母の家に預けられた。都心のマンションに暮らす叔母夫婦には幼稚園児と赤ん坊がい、弘はほとんど終日、子守役を押しつけられていた。

そのうえ冬休みが終わって学校に行くと、同級生たちが弘の家庭の内情をささやき合っていた。父親が家を出て、ほかの女と暮らしていること。間もなく両親が離婚することなどを、なぜか彼らは詳しく知っていたのだ。

そのことでも、弘は辛い思いをした。団地のそばの学校に転校するまでの三学期いっぱい、弘はクラスじゅうの好奇の

視線を一身に浴びる屈辱的な毎日を送っていた。

——洋二は、最初からいまの学校だから、そんな目にあわなくてすんだんだ。

弘は、ときどき弟が憎らしくなることがある。何も知らない弟の分まで、不幸を背負わされていると思うことがある。木立が密集している場所に来たとき、弘はそっと走る速度を落とした。洋二は気がつかずに、懸命に前へ走っていく。

④「ばあか、ひとりぼっちになってみる」

弘はそうつぶやいて、小径から木立のなかへ駆け込んだ。そのまま、こっそりと櫟の根かたにうずくまった。

藪蚊が、頸筋を襲ってくる。手の甲にまで食いつこうとする。弘は、そっと追いつながら、息をひそめていた。しばらくして、小さな足音が近づいてきた。ひどくあわてた、乱れた足音だった。半泣きの喘ぎが高まっている。

「お兄ちゃん、……お兄ちゃん」

心細い声で低く呼んでいる。弘の予想したよりも激しいあわてぶりである。

「おい、洋二。……どうしたい」

⑤「弘は、にやにやしなから、立ち上がった。洋二は、涙を溜めた眼で兄を見つめた。

「……あつちに、へんなやつらがいるの」

洋二が、いま来たほうを指さして告げた。

あわてていたのは、そのせいらしかった。

弘はがっかりして、口をとがらせた。

「へんなやつらって、どんなやつらだい」

「お兄ちゃんより大きなやつらが、三人」

おびえた顔を、弘はにらみつけた。強がって見せたのだが、内心びくつくものがあった。

「行こう。……どんなやつらがいたって、へっちゃらさ。心配すんなよ」

中学生らしい少年たちが三人、小径のそばの木株の根もとにしゃがみ込んでいた。土を掘って、何かを探しているようすだった。

弘と洋二は、そっと通り抜けようとした。すると、三人が一斉に顔を上げた。

「お前ら、どこに行くんだ」

一人が、大人のような太い声でいった。弘は、足をとめて、どもりながら応えた。

「あつちです。……林の向こう」

「そうか。でも、この道のまま行ったら、すぐに行き止まりだぜ。新しい家が建つんで、道がふさがれてんだよ」

あとの二人が、鋭い眼で弘と洋二を見つめていた。

いちばん大柄な少年が、いきなり兄弟を手招きした。

「おい。ちよっと、ここに来てみな」

弘は逃げだしたいのをこらえ、洋二を背中に隠すようにして近づいた。膝が震えていた。

「すぐ蚊に食われてんじゃねえか。足じゅう真っ赤だぜ、……かわいそうに」

「おい。林に来るときは、こんなのを持ってこなきやダメだよ。ほら、足を出してみな」

大柄な少年がポケットから取り出したのは、チューブ入りの「かゆみ止め」だった。

白い薬を大量にてのひらに取って、弘の足に塗りつけはじめた。冷たいような爽やかな感触が広がって、かゆみが消えていった。

「なんだよ、おまえ、泣くなよ。……おれたち、いじめているわけじゃねえだろ。ばか」

「そうか。スウスウして気持ちいいんで、泣けてきたんだよな。さあ、もうだいいじょうぶだぜ」

中学生たちからかわれながら、弘はむしように胸が熱くなって、涙を落としてつけた。洋二が心配そうに見上げていた。

「この道を行くと、途中で細い道が分かれているから、そっちへ行くといいぜ。おれたちがつくった新しい抜け道なんだ」

「はい。……ありがとうございます」

弘は、先生に向かってするように、礼儀正しくお辞儀をした。洋二も真似て、最敬礼していた。

そのとき、中学生たちが探しているものが、弘にも分かった。地面に置かれた透明なビニール袋のなかに、短い角を持ったカブトムシのさなぎが五匹ほど見えた。

中学生たちに教わったとおりの抜け道を行くと、間もなく林を出ることができた。

林の向こう側は、新興の住宅地であった。広い庭とガレージ付きの瀟洒な家々が、きっちりした区画に分けられて建ちならんでいた。

弘と洋二は、コロを探しはじめた。林を越えて声が聞こえてきたのだから、きっと林に沿ったあたりにいる、と見当をつけていた。

「コロ、コロオ。……コロ、コロオ」

二人は、かつての調子で呼びながら歩いた。家々から、呼応するように犬の吠え声が上がった。しかし、たいていは家のなかからで、しかもスピッツのような甲高い声だった。

「お兄ちゃん。……コロがいたよ」

洋二が、目ざとく見つけたのは、大きな鉄の扉のある家だった。格子になった門扉の向こうで、白い秋田犬が尾を振っていた。二カ月余り会わないうちに、すっかり大きくなっているが、コロにちがいがなかった。耳の立った形も、丸めた尾の振り方も、眠つきまで、コロそのものだった。

二人は、門扉に駆け寄った。コロは、ますます激しく尾を振った。——洋二が格子のあいだから手を差し入れたとき、弘はどきりとした。とっさに洋二をとめようとしたのが何故なのか、そのときは自分にも分からなかった。

コロは、ゆっくりと洋二の手先を嗅いでから、長い舌を出して舐めはじめた。

「コロ、さびしかったる。……ここにいたんだね。毎晩、ぼくたちを呼んでたんだね」

洋二が話しかけているあいだ、弘はコロのようすを見ていた。コロはたくましく、筋肉も張っていて、もうすっかり成犬だった。

「洋二、行こう。……はやく」

弘が、いきなり洋二の肩を引っぱった。洋二が尻もちをつきながら、門扉のなかを見ると、玄関のドアが開くところだった。

「どなたかしら、犬に近づくと危ないわよ」

声がしたときは、二人とも隣家の塀のところまで逃げていた。コロが、一声だけ、いつもの野太い声で短く吠えた。

「コロ、元気だったね、お兄ちゃん」

雑木林に入ったとき、それまで黙りこくっていた洋二が、そっといった。

「ああ、元気だったな」

弘は、短く応えただけだった。あとは思いに沈んだ顔で、「Ⅱ」を一文字にしていた。

「また、会いに来ようね、……お兄ちゃん」

「ああ、……また来ような」

応えながら、弘は学校で聞いた同級生の言葉を思いだしていた。——それは弟にはけっして話せないことだった。

その同級生は、弘と同じように新学年から団地に引っ越してきたのだが、前の家で飼っていた犬について話していた。

「うちの犬はね、保健所に連れていかれたんだ。……団地では飼えないし、誰も引き取り手がないんで、始末してもらったんだよ」

弘は、「始末」という言葉がすぐには分からなかった。その意味を説明されたとき、弘は相手を殴りつけたいほど憎んだ。いま、雑木林の小径をたどりながら、弘はその「始末」という言葉を⁽³⁾反すうしている。

⑧ 弟にはけっして話せないことが、もう一つあった。さっきのコロのことである。

——あれは、コロじゃなかった。

弘は、肩をすぼめてうつぶいた。

——だって、あの犬にはオチンチンがあったんだもの。

弘は、洋二とやらんで、唇を固く結んだまま歩きつづけた。

(内海隆一郎『内海隆一郎作品集 30%の幸せ「林を抜けて」より 発行メディアパル)

問一 【Ⅰ】、【Ⅱ】に入れるのにふさわしい体の部分をそれぞれ漢字で答えなさい。

問二 〰〰線(1)〰(3)のここでの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

(1)「終日」

ア 一日中

イ 昼の間

ウ 週末

エ 一晩中

問六 —— 線④ 「ばあか、ひとりぼっちになってみる」とありますが、この時の兄の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 弟が困るのをこのまま放っておいて、いつもの自分の苦勞を味わわせてやろうと思っている。

イ 弟にいつか仕返しをしたいと考えていたので、ちょうどいい機会がめぐってきたと思っている。

ウ 弟が自分に助けを求めてくるように仕向けて、その時になったらいばってやろうと思っている。

エ いつまでも自分を頼ったままではいけないので、父の代わりに弟をきたえておこうと思っている。

問七 —— 線⑤ 「弘は、にやにやしなから、立ち上がった」とありますが、なぜ「にやにやし」たのですか。その理由を二十字以内で答えなさい。ただし、句読点や符号も字数にふくみます。

問八 —— 線⑥ 「弘はむしろように胸が熱くなって、涙を落としてつづけた」とありますが、ここにいたるまでの兄の気持ちの変化の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少年たちに出くわしたことが気になりながらも、コロを探そうとあせっていたが、予想外に彼らが助言をくれたのでコロに会えると確信した。

イ 少年たちに出くわしてしまい、弟と一緒に彼らと戦えるか不安だったが、意外と親切だったので、争わなくてすんだことを心からうれしく思った。

ウ 少年たちに出くわして少なからず動ようし、何とかその場をきりぬけようとしたが、彼らの思いがけないやさしさに感動して緊張が一気にほぐれた。

エ 少年たちに出くわしてどうしていいかわからず立ちすくんでいると、予想に反して彼らが二人に親切にしてくれたので、いい人たちに会えたと思った。

問九 —— 線⑦ 「とっさに洋二を　　分からなかった」とありますが、この時、兄はどんなことを無意識に考えたと思われるか。十五字以内で答えなさい。ただし、句読点や符号も字数にふくみます。

問十 ———線⑧「弟にはけっして話せないことが、もう一つあった」とありますが、最初の一つはどのようなことですか。二十字以内で答えなさい。ただし、句読点や符号も字数にふくみます。

問十一 ———線⑨「唇を固く結んだまま歩きつづけた」とありますが、この時の兄の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア つらいことをまた自分だけがかかえこまなければならぬ運命をくやしく思っているさま。
- イ 気をゆるめると思わず話してしまいそうなので、しばらく黙っておこうと我慢がまんしているさま。
- ウ 今後のために、弟の間違いはきちんと正してやる方がいいのではないかと迷っているさま。
- エ この秘密だけは隠し通して弟の心を傷つけないようにしようと、兄として覚悟ごしているさま。

